

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『避難訓練から思う』

5月8日（木）の1時間目に避難訓練を行いました。想定は地震の発生です。地震多発国である日本では何年かに一度は大きな地震災害が起こります。まして、花折れ断層が近くにあることを思えば、決して震災は“対岸の火事”、“他人事”ではないことを肝に銘じておかなければなりません。

阪神淡路大震災から30年、東日本大震災から14年が経ちました。当時、妻のお腹の中にいた下の息子はもうすぐ30歳になります。本校にも20歳代の若い教職員がいますが、彼らは阪神淡路大震災以後に生まれたことになるのかと思うと驚きすら覚えます。また、東日本大震災の年に生まれた子どもは既に中学生になっています。時の経つのは本当に早いですが、簡単に忘れてはいけないことはたくさんあります。だからこそ、こういう機会に担任の先生は学活で、親は家庭で震災のことについて子どもたちと話をしてほしいです。

下の息子が住むバンコクで地震があって、建設中のビルが倒壊したのが3月28日でした。ほとんど地震が起らないとされていたタイでは、ビル建設に対する耐震工事が不十分で、あの件で工事の杜撰さも露呈したようです。今、息子の住んでいる高層マンションでは、上層階の住人がこぞって低層階への引っ越しを始め、将に“引っ越しラッシュ”になっているとラインで知りました。「高層階に住みたかったけどそれが叶わなかったことが、今ではラッキーだった。」とも添えられていました。

今年の訓練では、最も集合が遅かったクラスでも3分51秒。教室が4Fにあることを思えばこれは大変優秀な記録です。一昨年、初めてこの避難訓練に参加し、講評を述べた際には「集合完了は5分以内を目指しましょう。」と言ったことを思い出すと立派に目標を達成したことになります。一人ひとりの自覚と行動が全体のものになった証です。よくやりました。小中高生全員が素晴らしいです。

講評で述べたのは次の2つです。6歳から18歳が通う本校においては、あらゆる面で「小さい子優先」にすること。本校が避難場所になった際には、中高生は教職員と一緒に地域の方のお世話をしてほしいこと。児童生徒のあの真剣な眼差しは、内容を理解し、それを素直に受け入れたことを表していたように思います。

GWには各部活動で頑張る生徒の姿を観ました。その時の表情はしんどそうなそれも含めて“キリッ”と引き締まって凛々しくとても素敵でした。一方、避難訓練の時の表情には、試合の時とは違ってしんどそうなそれこそなかったけれど「真剣さ」が見えて気持ちがよかったです。何にでも真剣に取り組める生徒を愛おしくも思います。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『夢』

生徒のみなさんには夢があることだと思います。それは人によって違いがあるものですし、他人の夢をとやかく言うのは間違ってもいます。本校生徒は本当に色々なたくさんの夢（目標）をもって集っています。有名大学に向けて勉強を頑張る人、全国大会出場や優勝を目指して部活動に精を出す人、行事をはじめとした学校生活を大いに楽しもうとしている人、どれも立派な中学生高校生としての夢（目標）です。そして、本校の自慢は、一人ひとりの生徒が互いに仲間の夢を尊重し、それに向かう姿勢に敬意を払い尊敬し、応援し合っているところです。

宝塚歌劇団への入団、そしてあの大ホールの舞台に立つことを夢見て、見事にそれを実現した人がいます。

光華小学校・光華中学校から宝塚音楽学校へ合格し、今や大役を射止める女優に成長されました。宝塚では瑠璃花夏（るりはなか）と名乗っておられます。この方とのご縁で毎年高校2年生が宝塚歌劇の鑑賞に行きます。今年は5月2日に行きました。高校2年生にとっては朝からワクワク気分で、他学年の人たちよりも一日多いGWとなったことでしょう。

本番が始まる前に、今年度初舞台を踏む人たち40名が紹介されました。幕が上がると全員が一糸乱れぬ形で整列し、代表の3人が口上を述べます。毎年その合格発表の様子がTVで取り上げられるほど宝塚音楽学校は“狭き門”です。それを潜り抜け、厳しい稽古と勉強を経ての初舞台です。子どもの頃から歌やクラシックバレエ、ピアノやダンスを習っている人がほとんどです。そんなことに思いを巡らせ、その結果としての凛とした美しい姿に感動を覚えたのは私だけではなかったと思います。瑠璃さんも何年か前にこれを経験されたのでしょうか、本当に素晴らしくも凄い世界で夢を実現されたのだと再認識しました。

GWには多くの部活動の試合やコンサートなどがありました。部活動に頑張る生徒たちはこの大会に向けて精一杯の力を発揮しました。中学ソフトテニス部の個人・団体優勝、中学陸上部の総合優勝など、輝かしい成果を残しました。一方で、この結果の裏側には、試合に出られなかったり負けてしまったりして悔しい思いをした人もいます。夢を追い求め、その実現に向けて頑張る過程で人格が形成されます。努力に無駄なものなどありません。すぐに結果に結びつかなくても必ずいつかその成果は出ます。今後も夢に向かって頑張りを続ける人たちを全力で応援していきます。



公式パンレットより



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『校外学習』

寒い朝になりました。早朝の愛犬の散歩時には『もう袖を通すこともないだろう』と洗濯し、片づけかけていたフリースを着たほどです。

さて、今日は本校の校外学習です。これまで「ハイキング・ウォーキング」という名前を付けて「鍛練的」な要素を取り入れてきました。

その考え方も変化し、「高校生活も最後だから」と高校3年はUSJに行くようになり、BBQを計画するなど、徐々に様変わりを始めています。実は、私はこの時期の校外学習に「鍛練的」という要素を強く求めはしません。むしろ、しっかり楽しんで仲間や先生とのつながりを深めることを目的にしてほしいと思っています。

かつて、ほとんどの学校で「春の遠足」がありました。この時期にそれがあるのは、季節の変化を感じ自然に触れると共に、新しい学級の仲間との関係を結ぶことが目的でした。そこで、飯盒炊爨（はんごうすいさん）がよく実施されました。竈（かまど）に火をつける、飯盒でごはんを炊く、カレーや野菜炒め、焼きそばなどの料理を作る、上手い出来ないことも含めてその過程で生徒同士の間に絆が生まれます。また、指導する先生との間の関係づくりにも有効だからです。

“授業時間の確保”を主な理由に「春の遠足」が年間行事から消えていきました。集団食中毒の心配や火を使うことから火傷等の事故への不安も声高く言われだし、保護者も教師もナーバスになって一気になくなっていったのです。その時、この行事の意義を十分に理解し、楽しく取り組んできた経験をもつ私たち世代の教師たちは『一体、なんで！？』ととっても残念に感じたことを思い出します。

小中学校で組体操が取り組まれなくなったり、中学校や高等学校の部活動のあり方が変わりつつあったりもします。そんな中であって、私立学校である本校では独自の判断で春の校外学習を継続していますし、部活動にも熱心に取り組んでいます。

普段から授業を多めに組んでいるため、授業時間数に問題はありません。事故に対する不安はなくはないですが、事前にできる限りの備えをしています。

朝の出発時の生徒のあの笑顔に触れたとき、今もこの行事の意義を改めて感じています。学校の一番の目的は学力をつけることですが、学力には二通りあります。数値化できる「認知能力」と“粘り強さ”や“コミュニケーション力”などの数値化できない「非認知能力」です。行事は生徒に後者の学力をつけるのに効果が抜群です。今頃、USJで、六甲山で、京都市内の各所で、そして梅小路公園で、生徒たちは普段の教室の授業では経験できないかけがえのない学習をしているはずです。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『学びは何処にでもある』

今日は「学園花まつり」です。生徒が花を携えて登校するなど、朝から学校全体が華やかなムードになっています。学校の玄関には昨夕、花に飾られたお釈迦様の像が出され、それに誰もが自由に甘茶をかけられるようになっています。

さて、本日の式典に当たって生徒に配られた冊子の中の文章を紹介します。今一度読み返してみてください。

「天上天下唯我独尊」という言葉があります。釈尊（ゴータマ・ブッダ）が誕生した時の第一声として伝えられているものです。釈尊は生まれてすぐに話すほどの天才だった、そんなことを言っているのではありません。また、「俺がこの世で一番偉い」と威張っていることばでもありません。釈尊が生まれたことによって、はじめて明らかにされたことが「天にも地にも、唯、我、独りにして尊し」といういのちの世界でした。全世界を探してみても、これまでの歴史をたどってみても、私という存在は唯一であって誰とも代わることはできません。決して生まれ変わるものがない、ただ一度の人生を生きているのです、役に立つ・立たないという「ものさし」によって、自分が交換可能な部品であるように思うのは、この唯一性を見失っているからです。また、「独りにして」と言われるのは、はだかのままで尊いということを表しています。学歴、地位、財産、業績などを身にまとうて自分に価値をもたせようとするのは、自分の存在の重さに気づいていないからなのです。誰もが交換不可能な、かけがえのないいのちを生きている。これが釈尊が目覚めたいいのちの世界でした。生まれてこなかった方がよいいのちなど一つもないということ、不要な存在は何一つないこと、それが釈尊が誕生を通して私たちに呼びかけられていることなのです。（中略）生まれや家柄で人にレッテルを貼ったり能力の有無でその人の価値を決めようとしたり、どんな経歴の持ち主かで善人と悪人とに振り分けたり、そんな人間の在り方がどれほどお互いを傷つけあっているかをよく見ていたのが釈尊でした。それ故に、かけがえのないいのちに目覚めてこそ、お互いに優劣・善悪を争うことからはじめて解放されると呼びかけているのです。誰もが、どんな状況の中でもいきいきと生きていくことができる方法を釈尊は教えてくれています。（後略）

読めば読むほどにその奥深さが伝わってきます。私たちが日々の学校生活の中で大切に生徒たちに伝えたいことは、お釈迦様が既に2500年も前に仰っていたということに改めて気づき、驚きと共に感動を覚えます。今日の「花まつり」に当たって改めて学びを得ることができました。「学び」は色々な所にあるということにも気づかれます。いえ、『学ぼう』という気持ちがあるかによるのかもしれませんが。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『Goal』を見定めて さあ！』

8日に始業式、9日に入学式を行い、令和7年度が本格的に始まりました。今は『いよいよか。よし、頑張ろう！』という気持ちでいます。おそらく、私以外の教職員も、そして生徒のみなさんも同じような気持ちでいることだと思います。

さて、保護者や関係の皆様方にも知って頂きたい、始業式と入学式で生徒たちと共有した内容を要約して書き留めておきます。私が伝えたのは次の4つです。

一つめは、「一生の宝となる人間関係を築いてほしい」ということです。不登校や引きこもりなど、若者が学校や社会生活に不調をきたす件数が一向に少くなりません。そして、その理由は、ほとんどが人間関係です。人間関係をうまく創ることは、大人になってからも役に立ちます。学校生活はそのトレーニングの場だと思ってください。あなたの周りにいる先生や先輩、友達の力を借りて、一生の宝物となるような人間関係を築いて下さい。

二つめは「確かな学力を身に付けてほしい」ということです。確かな「学力」を身に付けている人は確かな人生を手に入れていることが多いです。自分に合った進路を見つけ、是非とも、それに向けて頭を鍛えるという努力を怠らない人でいてください。

因みに、「学力」には目に見えるものとそうではないものとがあります。点数や進路は目に見える学力ですが、そうでない「学力」は「非認知能力」と言われるもので、「最後までやりぬく力」や「周りの人と協力できる力」などがそれにあたります。特に京都光華では、幼稚園から大学まで一貫してこの「非認知能力」をつけることに力を入れています。京都光華の教育と先生を信じて、確かな「学力」を身に付けてください。

三つめは「ゴールを定めてそれを目指し続けてほしい」ということです。ゴールとは「最終地点」ではありません。実はゴールという言葉にはもう一つ重要な意味があります。それは「目標」という意味です。貴女はどんな目標をもって京都光華へ入学してきましたか。今、貴女の中にある目標、つまり、ゴールを見失うことなく求め続けましょう。先にあげた頭を鍛えることに加え、この過程で心と身体が鍛えられます。

最後の四つめに今年度のキャッチフレーズを共有しておきます。「伝統を重んじつつ、果敢に挑戦する」です。京都光華には素晴らしい伝統がたくさんあります。それに誇りを感じ、大切にしつつ、新しいことに果敢に挑戦して、共に更に素晴らしい学校を創っていきましょう。みなさんと素晴らしいパートナーになれることを願っています。

開校以来の学校大改革のゴールは「京都光華から Well-Being な社会を共創する人材を輩出する」ことです。この大目標に向けて勇気をもってさあ、動き出しましょう。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『新たなスタートに向けて』

3月の気温が低かったこともあって、校門の桜が今まさに満開の時期を迎えようとしています。明後日が雨の予報で少々心配ですが、この分なら始業式と翌日の入学式まで美しく咲き続けてくれるのではないかと期待しています。

さて、令和7年度がスタートしようとしています。実は教職員の間では既に始まっています。4月1日が私たち学校に勤める者にとってはお正月に相当する日で、当日の職員朝礼でもそのような話をしました。



校門の桜の木

今、学校では8日の始業式と9日の入学式に向けて着々とその準備を進めているところです。校長の重要な仕事の一つに校内人事を考えることがあります。新しい人事配置については去年の11月頃から考え始めました。その後、何度も検討を繰り返し、修正に修正を加えながら最終的に決定するのです。それが確定した今、新しい組織での会議が始まります。「どのクラスをどの先生が担当するのか」の授業配当をはじめ、学年や学級の経営方針や生徒指導のあり方などについても検討・確認されます。特に今年度は高校の制服が変わったことをはじめとして、来年度の大改革に向けての校則の見直しなどにも時間をかけました。授業のあり方や授業づくりの中で大切にすべきことについても時間をかけて協議・検討します。学校や生徒にとってはとても大事な部活動のあり方など、放課後の過ごし方についても時間を尽くして話し合います。

ザッとあげましたが、これ以外のことについても何日も話し合い、全体で、或いは部会で確認していきます。この過程を疎かにすると一年間が上手く回りません。

ところで、こういった会議をする過程で、教職員の頭には常に生徒の顔が浮かんでいます。一つひとつの話し合いの中で違った生徒の顔が浮かんでくるものです。自分の受け持つ学級に在籍する“あの子”。授業で受け持つ“あの子”。頭に浮かぶその生徒の様子や予想される行動が、教職員が会議の中で意見を言う際の判断材料なのです。

そのような中、私は26年度の大改革に向けて関係各所を訪問し、内容を説明したり助言をもらったりしているのですが、昨日訪れたところで頂いた助言に大きな力をもらいました。改革を実施しようとする際には、どうしてもその具体的な内容に意識が向くものです。「改革の内容が分かりやすいか」、「新入生にとって魅力的なものになっているか」等です。その点に助言を求めたところ、その方は次のように仰いました。

「そんな具体よりも、先生方の“やる気”と“自信”とが見えることが大事だと思います。京都光華には素晴らしい取組がたくさんあります。教職員全員が今やっておられる実践に自信をもって生徒を迎える姿勢こそが大事だと思います。」

大切なことに改めて気が付きました。生徒や保護者の方と一緒に、あらゆることに対して全教職員が自信をもって取り組める一年間になるよう十分に準備を整えます。